

□ 声 楽

國 土 潤 一

長年この「演奏年鑑」の声楽欄を担当されていた小山晃氏が急逝されたため、急遽編集部からの依頼を受けて当原稿を書いているが、そんなことを予想していなかった昨年なので、筆者が聴いた極めて公共性を欠いたチョイスの演奏会で、文章をまとめたこととお許し頂きたい。出掛けたコンサートのプログラムも、月々の批評依頼を書き終えたら処分したのも多く、手帳でのメモのみでの文章となっている。重ねてお許し頂きたい。

昨年の年明け最初に出掛けたのは、音楽の友ホールで1月6日に行われたメゾ・ソプラノの小林真理のリサイタルだった。小林真理は、東京藝術大学で中村浩子に師事し、大学院修士課程修了後にフランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院でレジュヌ・クレパンに師事。更に藝大に戻りメシアンの「ハラウィ」で博士号を取得してフランスに戻り、演奏活動の一方でストラズブル国立地方音楽院の教授も務めている声楽家。ドイツ歌曲や日本歌曲には注文もあったが、フランス歌曲の数々には、彼女のフランスで積み重ねた蓄積の厚みを感じられた。決して日本では有名な歌手ではないだろうが、彼女のように地道に海外で活動をしている声楽家がかかりいるはずだ。小林は筆者の藝大の同級生だったので、情報があつたために聴くことができた。同級生繋がりでは、イタリアのマントヴァで声楽教師として優秀な門下生を多く輩出しているヨーコ・タケダ（武田陽子）も、藝大の同門の同級生。大村博美、山本耕平、西村悟など有望株を育てているのは嬉しい。

そのヨーコ・タケダの弟子の西村悟が、山田和樹指揮日本フィルハーモニー交響楽団をバックにリサイタルを開いた（10月11日、東京オペラシティ）。今売り出し中のテノールを聴こうと多くの聴衆が詰めかけた。オペラのアリアをオーケストラと歌うという、歌手垂涎の構成で、西村の美質と共に現在の課題も垣間見えたが、今後を見守るに値する逸材であることが確認できた。未だ日本人声楽家の多くの課題である「girare」に西村も正面切って向き合っている。声楽芸術は「声」という肉体そのものの楽器を使う故、そこに民族固有の美意識が介入する。それをどこまで普遍的なものに高めるかは、声楽家に課せられた課題だろう。西村の姿勢に声援を送りたい。

声楽のもうひとつの必須条項が言語である。言語は単なる記録・伝達のツールではなく、民族独自の思想・哲学まで司るので、そこに横たわる障壁の大きさ、高さは、声楽に携わる者全てが認識すべきだろう。これは聴き手においても同様なのではなかろうか。その意味では、日本歌曲は日本人声楽家の大事なレパートリーであるのは自明の理だ。

故・畑中良輔から企画・構成が塚田佳男に移って存続している音楽の友ホールでの日本歌曲シリーズも大盛況だ。声楽との共演で定評のあるピアニスト、朴令鈴がプロデュースしている葛飾シンフォニーヒルズでの日本歌曲のコンサートに出掛けた（7月29日）。与那城敬、彌勒忠史ら実力派歌手を集めた出演者も豪華。客席も盛況で、日本歌曲の聴衆の層の多さを改めて感じる。ただ、この日本歌曲の歌い方、解釈の伝統、習慣に筆者としては異議を抱いているのを、ここで白状しなくてはならな

い。因習的な日本語歌唱の持つある種のルーティンな歌い方を肯定する聴き手の多くは、ノスタルジーを基調としてこれらのレパートリーを愛しているのであつて（だから客席の平均年齢は高い傾向にある）、これらノスタルジーを求める聴衆が居なくなる時代には、このままでは衰退の道を辿るかもしれないと危惧している。そんな思いに思い切つてメスをいれたのが、1月18日に埼玉県川口市のリリア1階の「催し広場」で筆者プロデュースで行った「童謡・唱歌の復権」と題したコンサートであった。2006年から川口リリア主催で筆者がプロデュースして年3回行っている「リリア歌の花束」シリーズの平成28年度は「日本語を歌う」というテーマであつたが、その第3回が「童謡・唱歌の復権」であった。富田沙緒里、澤村翔子、前山依加という3人の歌手と、ピアノの古川かりんが筆者との10数回の緻密な練習を経て辿り着いた本番を、「音楽の友」3月号で河野典子は以下のように評してくれた。「学校の教室で生徒が声を揃えて歌うために作られた作品群を、演奏会での鑑賞対象の域にまで高めるには、それぞれの作品の性格を的確に掴み、言葉のニュアンスを繊細に表現する必要がある。（中略）出演者全員の努力と熱意が、これらの歌を芸術の域まで引き上げ、聴き応えのあるコンサートに仕上げてみせた。」日本語歌唱は未だ確立されていない、と筆者は思っている。盛んな議論と試行錯誤が、今後も重ねられるべきだろう。

手前味噌を更に。この「リリア歌の花束」の平成29年度は「バロック三昧」と題して、7月7日にテノールの鈴木准による「イギリスのバロック」、10月4日にカウンターテナーの彌勒忠史による「モンテヴェルディ三昧」のプログラムが披露された。この2人の歌手の実力については改めて語るまでもないが、それぞれ最上の歌唱を聴かせてくれた。共にやってみたかったプログラムであつたことが、この結果を導き出したのだろう。主張を持つ歌手にとって、お仕着せでないプログラムが如何に「良き結果」を生むかの証左だろう。

7月20日に白寿ホールで忘れ難いリートのコンサートがあつた。ソプラノの天羽明恵とバリトンの太田直樹、ピアノの花岡千春によるヴォルフの「イタリア歌曲集」全曲演奏会である。天羽と太田は文化庁オペラ研修所時代からの盟友で、太田が音楽監督をしていた松本市民オペラでも息の合った舞台をいつも作っていた。花岡は太田と同じ松本深志高校と藝大での先輩である。実は太田に胃癌が再発したのを知った2人が、太田と共に演奏しようと開いたのがこのコンサートであつた。掛け値なし、ひいき目なしに立派な演奏であつた。太田は8月24日に世を去った。そんなに早く亡くなるとは予測できない歌唱だった。

白寿ホールでは11月21日にテノールの中島康晴のリサイタルを聴いた。飛ぶ鳥を落とす勢いで我々の視界に登場し、イタリアでキャリアを築いた中島だが、些か伸び悩んでいるのだろうか？ 発声の迷いが感じられた。声楽家が成長し続けることの難しさを改めて感じる。ドイツ・リートのピアニストとして定評のある松川儒がイタリア物でも素晴らしい支えを示した。

5月27日にJ Tアートホールで聴いたのは、「豊島正伸の歌謡曲」。長崎大、東京藝大で学んだテノールの豊島は、暁星中学・高校の教師をしつつ独自の演奏活動を展開していたが、花岡千春のピアノと共に昭和の歌謡曲の数々を味わい深く聴かせた。「歌う」という行為の根源・本質を感得させてくれるコンサートであつた。